

『文部時報』一九五四年二月号（帝国地方行政学会）

富山県における

産業教育のサービスセンター

矢口 新

一 その考え方

富山県は県土総合開発計画の中に、その一環としての総合教育計画を本格的にもっている県として現在唯一のものといつてよい。総合開発計画と教育計画との関連の問題については、世上種々の論議もあるが、それらの点はしばらくおき、実際に総合開発計画の中で教育計画がどう進捗していくものかを見てもみることは、われわれにとつて有意義なことであろう。私は一昨年たまたま総合開発計画の樹立に多少の援助をした関係もあって、その後、年に数回はこの県を訪れてその教育計画の実現してゆく経過を見せてもらっている。去年は六月・十月の二回富山県を訪れているが、特に私の関心をひいているのは、いわゆる産業教育のサービスセンターの活動である。たまたま紙面を与えられたのでその紹介をかねて二、三の問題点を考察してみたい。

まず、総合教育計画ではどんな構想を立てたか。

基本計画をみると、五つの項目に分けられて、その基本的な考え方が述べられているが、特に根本的なことは、その第一に述べられている。すなわちそれは、社会生活や産業の実態、課題を考慮して、教育

を総合的、有機的に運営するための中核機関として設けるものであること、そのために県下を地域的に区切ってこれを配置し、地域の実態に密着した教育を行おうとするものであるということである。

第二項以下には、その具体的な説明が述べられているが、サービスセンターは学校教育・社会教育はもちろん、一般産業界に対してもサービスを行うこと、地域的に産業の問題の調査研究を行い、かつその結果を公表すること、そのためには高度の施設設備を所有して、一般産業界や各種の産業行政機関と協力して、その教育機能をじゅうぶんに発揮しようということなどである。

さてこのようなサービスセンターの構想が生まれた理由は、以上の叙述の中にもじゅうぶんに察せられるが、なお多少の解説を加えると、次のようなことになるであろう。まず根本的なことは現在の学校教育・社会教育等が現在の産業の実態からあまりにかけ離れていることである。小学校でも中学校でも高等学校でもそこに行われている教育が、一つの概念としての教育であつて、教育とはこんなものというわくの中で考えられている。その伝統が続いて何十年も昔からの教育が行われている間に、生きた社会の方はどんどん進んでしまつて、近代産業社会といわれるような社会をつくりあげた。産業は複雑な構造をもち、またその課題も次第に複雑な様相をおびている。ところが教育の方は、伝統的な方式から抜けられないのである。教育は次第に古典的なものとなりつつあるのである。それは結局教育が観念的となり、形式的となつて、その結果教育された人間は実際社会に出て、具体の生活場面で生きた活動をすることができないようになる。新しい社会にかなつたセンスをもつた人間ができあがつてこないのである。教育の動脈硬化とはこういうことをいうのであろう。

こういう点がいちばん目につくのは、各学校の施設・設備であろう。が、とくに現在注目されているのは、職業教育のための施設・設備である。ここから産業教育振興法が制定されると考えられる。しか

し本質的にいえば、職業教育の施設・設備ばかりでなく、いわゆる普通教育といわれるものが、そもそも近代産業社会の生活に密着していかないのである。小・中・高を一貫してそういうものへ結びついた教育がされるようになっていないのである。いわゆる普通教育を受けた人間であつても、そういう産業社会に生活するのであり、その生活は近代社会、産業社会の中で行われるのであつて、それに即して教育されていなければ役にたたないのである。

こうなると、これは教育の全体的な改造の問題である。これはどうして一朝にしてなるような仕事ではない。そこで富山県では、教育と産業とを結びつける機関として、今までの教育機関の外に、産業教育のサービスセンターというものを設けようと考えたのである。産業教育振興法による各学校の施設・設備の拡充も、もとより必要であらうが、とかく動脈硬化した状態の中で新しいことが考えられても、過去の伝統の中に姿を消してしまうおそれもあるのである。そこでむしろ、別個にサービスセンターを設け、新しいタイプの教育を打ち出して、これを各学校にサービスするということが考えられたのである。それによつて経費の集中使用も可能となり、能率が向上するのではないかということも考えられる。

二 実現のあゆみ

さて実際にどのような具体的な形態をとつて、これが実現したかという点、まずはじめの試みとして、現在はいわばモデル的研究の段階であるので、まず農業に関するサービスセンターが一つと、工業と商業に関するサービスセンターが一つ設けられたのである。前者は富山県農業試験場に併置され、後者は高岡工芸高等学校に設けられた。

このうち農業試験場にサービスセンターが設けられたということは注目する事実であらう。このセンターの正式の名称は産業教育館であるが、その館長は試験場長である。こういう構想はやはり富山

県総合開発計画というものが基底にあつてなりたつてくるのであつて、これには知事・副知事をはじめ教育委員・教育長などの熱心な検討があつたのである。商工のそれについても同様な構想はあつたけれども、実際において近代工業に結びついたサービスセンターとなると、これはまたばう大なものであり、工業試験場をさえも超越しなければならぬことが予想されてくる。そこで当分の間、工芸高等学校において、近代工業社会と結合する素地をつくることになつたということであるようである。そういうことは困難なことであらうが、今の商工サービスセンターを中心にして、産業界と結合して新たな機関がつくられていく可能性はじゅうぶんに与えられるのである。これも総合開発計画の基盤の上において考えられているからだと思ふ。

人員配置をみると、館長は前述したように一方は試験場長、一方は工芸高等学校長の兼任であるが、その下に館長代理をおき、主として館長代理が、実際の運営に当たることになる。その他に主事・研究員が七、八名いて、いずれもその方面の教育にこれまでたずさわつてきた高等学校の教員を主として選任している。研究員は学校教員の身分のままこの仕事をするようになっていく。こういう人的構成も決して何の問題もなく作られたものではないのであつて、現在ただでさえ教員不足のおりから、学校側にとつては容易なことではなかつたのである。そういう抵抗がなかつたわけではないが、これも結局総合教育計画の理念が困難を克服したものといえよう。

設備費としては現在のところそれぞれ約一千万円を計上して充実につとめているが、今までのところまだじゅうぶんに実現してはいないがたい。農業サービスセンターでいえば、主として農業機械類を中心に設備を購入している。商工の方では各種材料・試験機械、あるいは電気計算機とか、タイプライター・事務用機械などを購入している。

ところで、これらのサービスセンターが発足する時に問題になったことは、その理念はわかったけれども、一体具体的に何をなすべきかということが大いに論ぜられたのである。機械の貸し出しを主とするのか、サービスセンターで自ら教育をするのかとさまざまな形式が考えられ、また、その教育の内容も、例えば農業のセンターでは機械化の問題を中心に行うべきか、畜産の問題を中心に行うべきか、あるいはその他の領域にするべきかなどということが論ぜられたのである。

その結果、最初に考えられた理念の最も中核的なものとして、新しいタイプの教育を確立するということに重点がおかれ、現段階では教育内容の領域を拡大するよりも、狭い領域の問題でも、集約して、じゅうぶん充実した理想的な教育を行うということになったという。そして、農業においては、総合開発計画の方針にも合致するところの富山県農業の機械化の問題をとりあげて、これに限って今年は新しい形の教育を実行してみることになったのである。いわば機械化の問題については、あらゆる点から究明して、この問題についての教育は至れりつくせりというものを打ち立ててみようという考え方である。これに従って設備の充実も考えられたわけである。

工商のセンターの方は、現在のところそういう新しいタイプの教育を打ち出すところまで行っていない。それはおそらく工商の産業としての性格・内容が複雑であって、農業のようにはっきりした課題が考えられなかったところにあるのであろう。しかし今後総合開発の線から次第にそういうものがはつきりしてくるであろう。今のところまだ多くの散漫な設備の貸し出しに終わっているようであるが、遠からず、もっと動きのあるものが打ち出される見通しにある。

さてこれだけの具体的な方針が定まってくるまでの経過はなかなか容易なものではなかったらしい。しかし常にそれを打開してきたのはなんとといっても総合開発計画、その一環としての教育計画という

ものがあって、問題の考察に筋を通して来たからであろう。

三 新しい教育の芽ばえ

さて、昨年十月末、私は、農業のサービスセンターの活動を見学する機会に恵まれた。その年の夏以来ずっと活動して、もう終わりに近づいているころであった。夏以来このサービスセンターは、福沢村の実習地——田畑山林を合わせて約百町歩の広大な実習地であって、農業試験場の分場である。戦時中までは錬成道場だったので、ここには百五十人以上の宿泊施設もある——この実習地を使って、各高等学校の三年生の生徒に対して発動機と耕作除草機に関する実習を行ったのである。一回五十人として、正味五日間の宿泊実習である。私が行った時は、すでにそれらは終わって、定時制高等学校の女子の生徒が実習に来ていた。これは特別な申し込みによって引き受けたのだそうであって、女子であるから、機械化の領域のほかに、共同炊事の領域についての実習も行っていた。

生徒は、サービスセンター専用の五十人のスクールバスによって、校門から実習地まで運ばれる。到着と同時にオリエンテーションがなされて、すぐ実習にかかる。種々の農用原動機・水冷石油機関・空冷石油機関・ディーゼル機関の分解が行われる。また各種の耕作除草機・ガーデントラクター・カブトラクター・ハンドトラクター等の操作が行われる。簡単なテキストもつくられていた。これらがそれぞれ数人に一台ずつ生徒に渡されるから、生徒は思う存分これにとりつくことができるのである。

夜は農村や農業に関する種々の教育映画を見て、これの検討やディスカッションが中心に行われたそうである。

こうして五日の実習が終わって生徒たちはいずれもじゅうぶん満足して帰って行ったということである。館長代理の堀先生の話によると、三十%がじゅうぶん自信をもったそうである、その他のものも、だい

たいわかったというところまでいつている。また、生徒の熱心さは驚くべきものがあり、ふまじめな生徒を特に注意しようとしていたが、ついに一人もそういうものがいなかったというのも堀先生の述懐であった。夜の座談会などでも生徒は非常に熱心に、なぜもつと早くこういうことをしてくれなかったかとこも訴えたそうである。五日間の生徒の生活も緊張そのものであつて、宿舍の清掃もいっさい自主的にやり、なんと欠点は見いだせない。なかには要求しない便所の清掃までりっぱにしていった学校もあつた、うんぬん。これらはみんな堀先生の報告である。

最後に堀先生は自分の感想として、教育において生徒に感激を与えろということはどういうことであろうか、こういう点からみると従来の農業教育については大いに反省させられるものがある、高等学校長をされた温厚な先生があらためて感慨深そうな顔をされたのである。

私の見た女子生徒たちは正味一日という短い期間の実習生であつたが、共同炊事や、パン焼工場の仕事など、喜んで実習していた。耕作除草機にも真剣になつて取りくんできた。もう少し時間があつて、これらの共同炊事の経営の問題が取り扱われて、農村の農繁期における共同炊事の経営などが研究されたら有意義であろうと思つた。女子の生徒もじゅうぶんそういうものの経営に自信をもち、感激をもつて新しい生活の実現にまいしんするようになるのではないか。男子の生徒たちの作文を見ても、これが富山県の将来の理想だ、これに向かつて進んで行きたいというのが多いのである。

私はこれらを見て、まだ芽ばえにすぎないけれども、これはりっぱに新しいタイプの農業教育を打ち立てている、新しい農業をうちたてる人間の教育、すなわち現在の農業の課題を克服するところの人間を教育し得るタイプのものであると感じたのである。

妙に古いことを言うようであるが、教育はやはり人間を感激させるものでなくてはならない。教育は決して事務ではないのである。人を

理想的なるものに導き、それをいだけせ進ませるものでなくてはならない。そしてそれは近代産業社会では、昔のようにただ単に個人の人格という偶然的なものによることはできない。やはり近代的合理性の上に立つていなくてはならない。

そういうものがサービスセンターに結集しているように思われた。教えている先生が、少し悪口のいえば、のぼせているのである。しかものぼせていることができるのはそばからみてうらやましいのである。形式的なきまりきつた、枯渇した学校教育に対して、新しいいぶきを吹きこんだものである。

これは今の農村社会が悩んでいるものを端的にえぐり出し、これを克服する手段をはつきり描き出し、その将来の理想にはつきりふれさせ、そういう問題に正面からとりくむ勇氣と信念と技術を与えたものだといふことができる。こういう教育が総合開発を根底としその上に総合教育計画を樹立し、十年、二十年の大きな見通しの下に着々と実施されつつあることはきわめて示唆的である。

私は現代の教育が、教師と教室と教科書だけで成り立つという根本観念でなりたつていることに対して、もう一度反省してみる必要があるように思う。近代的施設・設備をもつて、近代的企画で教育が運営されなければ、人間を形成することはできないのではないだろうか。教育が社会の全面的協力の下に、全社会的営みとして営まれるところ、人々をふるいたたせ、成長させる力が出てくるのではないか。お隣の中共がその教育に成功している面があるとするなら、そういうことではなからうか。私は、サービスセンターをみて、社会と教育の問題、総合的社会計画というものの問題を、新しく社会の進歩の問題として見直してみたいと思つたのであつた。

(国立教育研究所員)